

平成27年度実施事業評価

事業名	柏原地区古民家活用サポーターズ		
団体名	未来へつなぐ古民家活用サポーターズ	担当課	山東自治振興課
背景	<p>柏原地区はJR柏原駅から徒歩圏内であるにもかかわらず、住居や店舗、施設として活用されずに空き家となった古民家が目立つ。空き家は景観、防犯、また安全上の問題や地域の活気が失われる要因の一つとなっており、地域住民からも何らかの活用策を望む声が高まっている。</p>		
事業内容	<p>柏原の古民家をコミュニティスペースとして活用し地域の活性化につながる事業を展開する。(宿場の特徴を生かす活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貸館事業 (イベント開催・アートツアー・上映会・写真コンテスト・コンサートライブ・歌と楽器等) ・飲食事業 (特産品の開発・カフェ・ワンデーシェフ・地域の交流会・居酒屋) ・宿泊事業 (小学生を対象に『地球家族』の体験民泊・中学生の教育旅行) ・農業体験・観光客の宿泊) 		
協働のメリット	<p>アピール及び物産店などの参加で認知度が高まったことにより、広く活動を知っていただくことができた。</p> <p>また、地域に新しいコミュニティスペースを生み出すことで、さらなる地域活性化、住みよいまちづくりに繋がり、同様の課題を抱える他地域へ活用モデルが広がる。</p>		
成果	<p>新しくコミュニティスペースを生み出したことにより、地域の方だけでなく、他府県からも柏原に来ていただくことができ、地域の活性化に貢献できた。</p> <p>継続することでマスコミにも取り上げていただいた、他団体のイベントにも参加できて活動内容を広めることができた。</p>		
自己評価 (団体)	<p>継続は力なり、人と人がつながり常に新鮮な出会いが発生している。</p>		
自己評価 (行政)	<p>「こみんかにきてみんか新聞」やフェイスブック等により、団体の知名度は少しずつ浸透している。地元の方の参加率を高めること、また、事業を継続できるよう、スタッフの増員と計画性のある取組が必要である。</p>		
講評	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアいっぱい土日の活動をされているので、平日がもったいない。地域の別の団体貸す等のルールを生み出せばすごい施設になっていく。 ・今後の継続にはお金が回るしくみと人が育つしくみが必要。 ・コミュニティの交流の場であり、地元物産の開発の場や宿泊の場でもあるという多岐にわたった活動が素晴らしい。宿泊マネジメントするだけでも大変だと思うるので、組織を確立する必要がある。 		

事業名	東西東西プロジェクト		
団体名	はびろネット	担当課	山東自治振興課
背景	<p>米原市柏原地域(学区)は少子化・高齢化が進み、活力に乏しい地域となっている。しかし、この地域は古くは東山道、中山道が通る交通の要衝として栄え、東西文化の分岐点でもあり、米原市、滋賀県の「東の玄関口」と考えた場合、東西文化の中心地といえる。この地域の「文化力」を再認識・再評価し、地域活性化・まちづくりに生かすとともに、地域の教育資源の発掘と地域教育力の向上に寄与したい。</p>		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・10月24日(土)、柏原中学校体育館で落語会「滋賀・岐阜県境 境目寄席」を開催。100名を超える入場者を得ることができた。 ・「滋賀・岐阜県境を越えた方言アンケート調査」(あわせて食文化調査も同時進行)を実施。有効回答数800を超え、これまでにない本格的な調査となった。 ・専門家の分析を中心に報告書を作成。その後、「方言ハンドブック」を制作。 ・ホームページを中心に今回の成果を公表し、継続的に取組んでいく。 		
協働のメリット	<p>今回のアンケート調査では、市内3中学校(柏原・伊吹山・河南)だけでなく多くの市役所職員の協力を得られた。関ヶ原町とも共同企画として実施したので、県境を越えた調査を実現できたことも大きい。</p>		
成果	<p>滋賀・岐阜県境が東西方言の境界領域であることはよく知られているが、今回の調査によって両地域は対立しながらも、京都や名古屋とは異なる言語文化圏を形成しているという事実が浮き彫りになった。</p> <p>今回は中学生、その親世代、祖父母世代と3世代の調査を行ったが、中学生が祖父母世代の方言を受け継いでいるという興味深い結果となった。</p>		
自己評価(団体)	<p>方言・ことばについて、私たちは素人であったが、専門家の協力で県境を越えた調査を実施することができた。学術的にも他に類を見ないものといえる。詳細な報告書も評価が高い。ただし、方言・ことば文化は調査研究が主で、歴史文化や食文化のように、観光・産業など多方面への影響力はあまり強くない。調査結果をどのように活かしていくか検討したい。</p>		
自己評価(行政)	<p>今回の「方言・ことば」に関する調査報告書は非常に専門的な成果物となったが、調査・研究過程で関ヶ原町との共同企画の折衝を行うなど、団体として活動の幅を広げている。県境を越えた広域連携の一步として、今後、様々な事業の発展に寄与すると思われる。</p>		
講評	<ul style="list-style-type: none"> ・方言にこれだけの違いがあるなんて、本当に面白い調査。方言は当事者地域だけでなく他地域の目でも興味深いと思われるので、SNSのスタンプ化などの可能性を広げてほしい。 ・言葉というきっかけで自分の地域のよさを改めて学び直せる機会にしてほしい。伊吹山をとりまく連携などつながるといいのでは。 ・全国に消えゆく文化がたくさんある中、学術的にも貴重。後世に残していくのが大事。新たな県境を超えた連携の見直しやつながりがこれから生まれていくと思うので、行政が連携するきっかけを団体側から生み出してほしい。 		

事業名	地域で子どもを育てる“冒険遊び場”		
団体名	上丹生プロジェクトK	担当課	子育て支援課
背景	<p>「子ども自身の学力・体力の低下、肥満の増加、コミュニケーション能力の低下、意欲や向上心の低下の原因の一つに、群れて遊ぶ場、多くの大人に見守られて育まれる暮らしの場が不足していることが挙げられ、自由に遊べる環境を大人が用意する必要がある。県でも、子育て三方よしコミュニティ事業の一環として、冒険遊び場づくりの普及が進められており、健全な子どもの成長を支援すると同時に、まちづくりの担い手となる子育て世代の不安解消や、地域に関わっていく意識改革にもつながり、大きな問題を抱えている子どもを増やさない予防策の一つとしての「冒険遊び場」が重要になっている。</p>		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月第四土曜日・日曜日の二回、定期開催。年間二回の特別企画を開催 ・啓発活動の一環として市の企画への参加や、湖北地域との交流会を開催 ・研修を兼ねて講演会（渡部達也氏）や、森のようちえん講演会に参加 ・長浜八幡神社、ふくらの森、養鱒場等への遊び場の出前講座を実施 ・県立大や地元の小・中学校での遊び場の紹介 		
協働のメリット	<p>地域の団体が市と協働することで、市民の方も安心して活動に参加できたり、講演会などの開催についても、市行政の役割は大きい。地域団体と市が協働することで、双方の共通目標の達成が見えやすくなる。</p>		
成果	<p>協働事業としては終了したが、三年間の実績を踏まえ今後も冒険遊び場を継続していく。地域の理解と自主財源の目処も見えてきたことで実現は可能と考えている。同時に、市内に冒険遊び場を増やしたり、行政の子育て支援事業にも、可能な範囲で協力していく。</p>		
自己評価（団体）	<p>資金面や情報・広報面で補助いただき、定期開催を続けることができ、冒険遊び場に関心を持つ方が多少でも増えたことで、一応の効果があったと思う。子育てしやすいまちを目指す米原市の施策とも重なる部分が多い冒険遊び場や、冒険遊び場が持つ要素を市内に広めて行きたい。</p>		
自己評価（行政）	<p>子どもの居場所として、また、米原ならではの暮らし方の要素として、冒険遊び場が重要な意味を持つものと認識することができ、子どもの居場所の大切さや必要性を考える契機となった。次年度以降も、市全域へと広げるための支援の在り方を検討することができた。</p>		
講評	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害が各地で起きているので、自然をよく知っていることが大事。遊びを通じて自然をよく知り自然と親しめる環境で強い体と心を育ててほしい。 ・地域で子育てを支援する風土を作られているのが素晴らしい。3年の間に子どものもつ力が示されてある程度のルール設定の下で子どもにも責任を持たせて遊ばせる形ができている。 ・行政が入ると枠組を作りがちなので、施策化する上では子どもの目線での取組を団体と共に考え、続けてほしい。 		

事業名	米原まちづくりネットワークの構築		
団体名	ルッチまちづくりネット	担当課	政策推進課
背景	市のまちづくり活動の広報が新たな市民の活動参加につながっていない。まちづくり団体への新たな参加者が少なく、活動の継続性、発展性に課題を持つ団体も多い。活動団体間の直接の交流機会が少ない。		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「・・・」のまどカフェ 3回実施 のべ参加者約 100 人 ・コミュニティ・ツアー研修 長野県伊那市、福井県鯖江市および福井市 ・まちづくり人財ノ森集会 2015+ 参加者約 100 名 基調講演：「福井木守り舎」「ひこねで朝市」、まちづくりクロストーク ・ルッチまちづくり大学サポート 公開講座 参加者約 100 名 研修旅行アレンジ 参加者 15 名 ・まいばら茶論ミーティング(総合計画作成市民ワークショップ)参加者約 40 名 		
協働のメリット	第二次総合計画(案)への市民の意見の反映など行政主導のまちづくりに市民参加を促す窓口を提供できた。さらに行政職員に協働事業に関与してもらうことで市民の考えるまちづくりの概念を意識してもらい、イベントの企画運営を通じて行政部署間が連携をとることで各部署の担当事業が相互に効率化する可能性を考えるきっかけとなった。		
成果	人が出会い、語り、つながるきっかけとすることを意識し、まちに対する気づきや自分も継続的にまちづくりに関わるという可能性を参加者に感じてもらった。総合計画策定に係るアンケート調査やワークショップにおいて、企画段階から市と連携し、ルッチまちづくりネットが持つネットワークやノウハウなどをもとに、市民目線での意見の把握方法や、多くの方に市の計画づくりに関わっていただく仕掛けや工夫ができた。		
自己評価(団体)	計画したことをほぼ予定通りに実施することができた(アウトプットは達成)。イベント参加者や周囲の人たちに「今後自分たちが更にまちに関わり、良いまちにしていきたい」という意識がつくられたかという点については十分とは言えない(アウトカムは未達)。そのためには今回のような協働スタイルが効果的と考えられ、時間をかけて継続的に取り組む必要性を感じた。		
自己評価(行政)	総合計画策定にかかるアンケートやワークショップ、参加の仕組みづくりについても協力いただき、少し団体の負担が大きかったのではないかと感じる。少しでもまちづくりに意識や関心のある市民を増やすためには、関わるきっかけや気付きを与える取り組み、既存の団体やまちづくり実践者のつながりづくり、連携強化を今後も継続して実施していくことが必要である。		
講評	団体が入ることで行政側に横串をさせたのは本当に大きな成果。ただ、米原の30年先のために今何を課題解決するべきなのかを考えた時に政策推進課と生涯学習課に加え、人の暮らしを支えるという視点として福祉分野を横串に加えてこないと30年先の地域を支えるという力にはなっていないのではないかと。課題があった時にルッチまちづくりネットが問題提起すると人が集まって気楽に話あえる環境があるというのが重要。他の場面でも協働して話し合う場を作ってほしい。民間は協働で事業をすればサービスをしがちになってしまうので専門性のある部分はきちんと対価をもらう形にしないといけない。		

事業名	米原ファミリーアートフェスタ		
団体名	米原ファミリーアートフェスタプロジェクト	担当課	政策推進課
背景	地域のつながりや、家族のつながりが希薄になったといわれる中で、現代の子どもたちは伝統文化や芸術や自然に触れ、そこから学ぶ機会も少なくなっている。様々な学びや体験から自分の意見や感想を表現し、家族や仲間と語ることで、社会の変化に対応できる力や「豊かな心」、「自ら考える力」、「生きる力」の育成が求められています。		
事業内容	<p>子どもたちが日常生活の中で文化や芸術に触れ、生活の中に取り入れ、創作活動を通じた自己表現力の向上と、伝統文化を尊重したグローバルな感覚を身に付けた子どもの健全な育成と成長を目指し実施した。</p> <p>開催日時：1月17日（日）10：00～16：00</p> <p>場 所：ルッチプラザ</p> <p>内 容：絵画、お茶・お花、木工、音楽のアート体験できる4つの体験コーナーにおいて、専門講師によるレクチャーと作品製作・体験を行った。また他の市民団体と連携し、地域の食材を紹介するブースを設けた。参加者約100名。</p>		
協働のメリット	市民へ参加事業の内容を迅速に広く伝達でき、事業開催日に協働で作業実施が出来た。行政、芸術教室のスタッフ、大学、市民団体など様々な団体を巻き込んだイベントとなったことで、スタッフ間のネットワークの構築ができた。		
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・親子同士、参加者同士が話しながら作品製作、体験を行うことができたため、参加者同士のコミュニケーションが図れた。 ・専門知識を持った講師から絵画、木工、音楽のレクチャーや、地域の人と交流しながら石臼挽き体験等を行うことで参加者の芸術や伝統文化などへの関心が強まった。 ・お茶・お花体験など、普段は敷居が高いと感じられがちな体験でも気軽に参加することができ、芸術にふれるきっかけづくりの場となった。 		
自己評価（団体）	市民団体、大学等の事業参加により構築した事業内容展開が市と共にでき、問題提供補填も行えた。事業計画実施会議参加者が会議参加者が述べ8割だった。専門知識を共有することで実施した協働事業としての効率化、効果上昇、達成感共有ができた。		
自己評価（行政）	事業実施に向けて、複数回会議を行い、積極的に情報共有を図ったが、双方の想いのズレがあった。芸術教室の講師や教え子、大学生、市民活動団体など多様な団体を巻き込み、親子でさまざまな芸術にふれるきっかけづくりの場として他の公民館事業と差別化された大きなイベントにすることができた。		
講 評	ファミリーアートという観点は素晴らしいので、意味が明確に出るといい。また、米原市の伝統的文化を尊重し伝承できる事業をされてもいいのでは。協働事業を実施する上で苦勞をされたことは伺い知れる。公民お互いの違いを話し合い、見極め、お互いの目標に向かっていくプロセスが大事。双方苦勞し、いい学びの機会になったのでは。		

事業名	マイクリングマップの作成		
団体名	マイクリング・プロジェクト チーム	担当課	生涯学習課
背景	<p>市民アンケート調査における今後やってみたいスポーツにサイクリングへのニーズがあり、米原駅からの交流人口拡大に向けたスポーツツーリズムの展開など、地域の特色あるスポーツの推進が求められている中、米原市内にある観光や歴史などの魅力資源が十分に生かし切れていない。</p>		
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・マイクリング・マップの作成 結びの岩コース、伊吹せんろみちコース ・サイクリングイベントの実施 サイクルアピール&結びの岩夕焼けマイクリング他2回 ・その他 交通安全事業への協力、サイクリングマップ等の監修協力など 		
協働のメリット	<p>市民協働事業として実施することにより、地域の魅力資源を生かしたマップ作成やサイクリング事業の積極的な発信をすることができた。また、スポーツ推進委員の協力により、事業のスムーズな運営を行うことができた。市内には、米原駅からのサイクルツーリズムの機運を高めることができた。</p>		
成果	<p>その他、自転車マップの監修・協力を通じて、自転車関係者への認知度を高めることができた。(ビワイチガイドブック*校正中、季刊紙サイクル、北びわこサイクリングマップ)</p> <p>メンバーも着実に増えてはきているが、まだまだ人材の確保が大きな課題。継続した取り組みによる積極的な情報発信が必要。</p>		
自己評価(団体)	<p>組織の育成や、人材の発掘など課題が多いが、メンバーも着実に増え、米原駅のサイクルステーションやモンベルの動きなど関係団体と連携しながらサイクルツーリズムの機運を高めることができた。ビワイチガイドブックや季刊誌サイクル(関西圏域に2万部配布されるフリーペーパー)、湖北サイクリングマップなど、マイクリングの認知度も着実に向上しており、今後も、米原駅から人口交流の拡大に向けて、サイクルカフェの設置検討やビワイチの推進、近江鉄道サイクリングトレインの活用など、米原からのサイクルツーリズムの発信に努めたい。</p>		
自己評価(行政)	<p>市民のみならず、市外・県外からもイベントへの参加者がいた。また、参加者同士の交流や情報発信があり、米原市の魅力の発信が行えた。スポーツ推進計画において掲げている施策を推進しており、オリンピック・パラリンピックや2巡目滋賀国体を見据えた事業であるため、今後の事業発展に大いに期待したい。</p>		
講評	<p>米原の新しい魅力が見えた素敵なマップ。車では見えない自転車だからこそこの気づきがマップの中にあってほしい。女性目線・子育て世代目線・高齢者目線などのあるマップになると、スポーツととらえなくても生活や文化や観光的な場面と結びついていく素晴らしい活動になる。</p> <p>団体の活動全てが協働事業になっている。協働での活動と団体自身の活動の区別や整理をして今後の組織としての方向性を考えてもらいたい。</p>		